

追悼 立川 涼 先生

平成29年5月9日に愛媛大学名誉教授 立川 涼先生が、慢性呼吸不全のため永眠されました。3月中旬に持病の呼吸器疾患が悪化し、東温市の病院に入院して闘病・治療を続けてまいりましたがその甲斐なく帰らぬ人となりました。謹んで哀悼の意を表し、お悔やみ申し上げます。

立川先生は、東京大学農学部農芸化学科を昭和28年3月に卒業後、同大学農学部農芸化学科土壌学研究室の助手、米国オハイオ州立大学農学部のポスドク研究員を経て、昭和41年5月から愛媛大学農学部農芸化学科農芸分析学研究室の助教授として着任し、以降環境化学を専門とする先端研究と大学教育・市民教育に永年貢献し、わが国の学術・文化の振興に多大な功績を残されました。

また先生は、環境化学の先導的研究者として、ダイオキシン類やポリ塩化ビフェニールなど人間活動により生成、排出される化学物質が空気や水を介して地球規模で広がり、陸域・水域の生態系に有害な影響を及ぼすことを世界に先駆けて科学的に実証し、その学術的・社会的・政策的重要性を各界に広く啓蒙しました。複雑・多岐にわたる化学物質の汚染と影響の問題に半世紀前から長期的展望を持って挑戦し、わが国において初めて環境化学の学問体系を確立するとともに、世界をリードする輝かしい国際的研究業績を積み重ねました。その成果は約450編の著書・原著論文として発表され、ISI引用最高栄誉賞、三宅賞、山階秀麿賞などの学術大賞を受賞するなど、国内外の高い評価を得てきました。

また上記の研究成果は、ダイオキシン類対策特別措置法などわが国の化学物質審査・規制に関わる重要法案等の制定にも多大な貢献と波及効果をもたらしました。さらに、社会と共に学び考える姿勢や啓蒙活動も高く評価され、その功績は日本放送協会放送文化賞や瑞宝重光章の受賞/受章に繋がりました。こうした傑出した業績に加え、高潔で温厚な人柄は多くの人々の人望を集め、愛媛大学大学院連合農学研究科長、愛媛大学農学部長、高知大学長、愛媛県環境創造センター所長、ダイオキシン・環境ホルモン対策国民会議理事長等の要職を務めるなど、大学教育・市民教育の場でも大きな貢献を果たしました。とくに、学生教育には精力的・情熱的に取り組まれ、32名の博士、91名の修士、206名の学士を社会に輩出しました。博士の学位取得者のうち、14名が大学教授のポストを獲得し、環境学の第一線で活躍していることは、立川先生の人材育成能力が卓抜していることを示す業績です。また、学会活動にも熱心で、日本環境化学会では、森田昌敏前会長と協力して設立時から運営と発展に尽力されました。

お年を召され研究や管理運営の第一線を退かれても大局的な価値判断能力には益々磨きがかかり、鋭い洞察力で切り込む論法には太刀打ち出来ないものがありました。先生から学ばなければならぬことがまだ山積する中で、このような形でお別れしたことは非常に残念です。立川先生が愛媛大学沿岸環境科学研究センター(CMES)の化学汚染・毒性解析部門(岩田研究室・国末研究室)に残された有形無形の学術的資産は、我々が必ず成長・発展させますので、天界より見守ってください。

平成29年5月22日

愛媛大学特別名誉教授
田辺 信介

立川 涼先生ご略歴

生年：昭和5年12月25日
享年：88歳

(学歴・職歴)

昭和28年 3月	東京大学農学部農芸化学科卒業
昭和33年 3月	東京大学農学部大学院研究奨学生後期（旧制）満了
昭和33年 4月	東京大学助手（農学部農芸化学科）
昭和37年 3月	農学博士（東京大学）
昭和38年 8月	米国オハイオ州立大学農学部PDフェロー（昭和39年10月まで）
昭和41年 5月	愛媛大学助教授（農学部農芸化学科）
昭和51年 4月	愛媛大学教授（農学部環境保全学科）
昭和62年 4月	愛媛大学大学院連合農学研究科長（平成3年3月まで）
平成5年 6月	愛媛大学農学部長（平成7年5月まで）
平成7年 9月	高知大学長（平成11年9月まで）
平成12年 4月	愛媛県環境創造センター所長（平成23年3月まで）

(受賞歴)

昭和56年 2月	愛媛県政表彰
平成4年 3月	水環境学会功労賞
平成5年 3月	日本放送協会放送文化賞
平成10年10月	地球化学研究協会学術賞（三宅賞）
平成12年10月	ISI引用最高栄誉賞
平成19年 4月	瑞宝重光章
平成20年 9月	山階芳麿賞（鳥類学）



2015年3月撮影



1981年3月撮影